

スーホの白い馬

おおつか ゆうせう 作
リー・リー・シアン 絵

中国の北の方、モンゴルには、広い草原が広がっています。そこにすむ人たちは、むかしから、ひつじや牛や馬などをかって、くらしていました。ふこのモンゴルに、馬頭琴という楽器があります。がっきのいちばん上が、馬の頭の形をしているので、馬頭琴というのです。いったい、どうして、こういうがっきができたのでしょうか。

3. それには、こんな話があるのです。

4. スーホは、年をとったおばあさんとふたりきりで、くらしていました。スーホは、おとなにまけないくらい、よくはたらきました。毎朝、早くおきると、スーホは、おばあさんをたすけて、ごはんのしたくをします。それから、二十頭あまりのひつじをおつて、広い草原に出ていきました。

5. スーホは、とても歌がうまく、ほかのひつじかいたちになれたのまれて、よく歌を歌いました。スーホのうつくしい歌声は、草原をこえ、遠くまでひびいていくのでした。

6. ある日のことでした。日は、もう遠い山のむこうにすずみ、あたりは、ぐんぐんくらくなってくるのに、スーホが帰ってきました。

7. おばあさんは、しんばいになってきました。近くにすむひつじかいたちも、どうしたのだろうと、さわぎはじめました。

8. みんながしんばいでたまらなくなったころ、スーホが、何か白いものをだきかかえて、帰ってきました。

9. みんながそばにかけよってみると、それは、生まれたばかりの、小さな白い馬でした。

10. スーホは、にこにこしながら、みんなにわけを話しました。

「帰るとちゅうで、子馬を見つけたんだ。これが、じめんにたおれて、もがいていたんだよ。あたりを見ても、もちぬらしい人もいないし、おかあさん馬も見えない。

ほうつておいたら、夜になって、おおかみに食われてしまった。もうかもしれない。それで、つれてきたんだよ。」

11. 日は、一日一日とすぎていきました。スーホが、心をこめてせわしたおかげで、子馬は、すくすくとそだちました。体は雪のように白く、きりつと引きしまつて、だれても、思わず見とれるほどでした。

12. あるばんのこと、ねむっていたスーホは、はつと目をさました。けたたましい馬の鳴き声と、ひつじのさわぎが聞こえます。スーホは、はねおきると外にとび出し、ひつじのかこいのそばにかけつけました。見ると、大きなおおかみが、ひつじにとびかかろうとしています。そして、わかい白馬が、おおかみの前に立ちふさがって、ひつじにふせていました。

13. スーホは、おおかみをおいはらって、白馬のそばにかけよりました。白馬は、体じゅうあせびしりてした。きつと、ずいぶん長い間、おおかみとたたかっていたのでしよう。

14. スーホは、あせまみれになった白馬の体をなでながら、兄弟に言うように話しかけました。

「よくやってくれたね、白馬。本当にありがとう。これから先、どんなときでも、ぼくはおまえといっしょだよ。」

15. 月日は、とぶようにすぎていきました。ある年の春、草原にたいに、知らせがつたわってきました。このあたりをおさめているとのさまが、町でけい馬の大会をひらくというのです。そして、一等になったものは、とのさまのおすめとけつこんさせるというのでした。

16. この知らせを聞くと、なかまのひつじかいたちは、スーホにすすめました。

「せひ、白馬にのつて、けい馬に出てらん。」

17. そこでスーホは、白馬にまたがり、ひろびろとした草原をこえて、けい馬のひらかれる町へむかいました。

18. けい馬がはじまりました。たくましいわかものたちは、いっせいにかわのむちをふりました。馬は、とぶようにかけます。でも、先頭を走っていくのは、白馬です。スーホののつた白馬です。

「白い馬が一等だぞ。白い馬ののり手をつれてまいれ。」

とのさまはさげびました。

19. ところが、つれてこられた少年を見ると、まずしいみなりのひつじかいてはありませんか。そこで、とのさまは、おすめのむこにするというやくそくなどは、知らんふりをして言いました。

「おまえには、ぎんかを三まいくれてやる。その白い馬をここにおいて、さつさと帰れ。」

20. スーホは、かつとなって、むちゅうで言いかえました。

「わたしは、けい馬に来たのです。馬を売りに来たのではありません。」

「なんだと、ただのひつじかいが、このわしにさからうのか。ものども、こいつをうちめせ。」

とのさまがどなりたると、家来たちが、いっせいに、スーホにとびかかりました。スーホは、大せいになぐられ、けとばされて、気をうしなつてしまいました。

21. どのさまは、白馬をとり上げると、家来たちを引きつれて、大いばりて帰っていききました。

22. スーホは、友だちにたすけられて、やつとちまで帰りました。

23. スーホの体は、きずやあざだらけでした。おばあさんが、つききりて手当てをしてくれました。おかげで、何日かたつと、きずもやつとなおってきました。それでも、白馬をどられたかなしみは、どうしてもきえません。白馬はどうしているだろうと、スーホは、そればかり考えていました。白馬は、どうなったのでしよう。

24. すばらしい馬を手に入れたとのさまは、まったくいい気もちでした。もう、白馬をみんなに見せびらかしたくてたまりません。

25. そこで、ある日のこと、とのさまは、おきやくをたくさんよんで、さかもりをしました。そのさいちゅうに、

とのさまは、白馬にのつて、みんなに見せてやることにしました。

26. 家来たちが、白馬を引いてきました。とのさまは、白馬にまたがりました。

27. そのときです。白馬は、おそろしいいきおいてはね上がりしました。とのさまは、じめんにころげおちました。白馬は、とのさまの手からたづなをふりはなすと、さわぎたてるみんなの間をぬけて、風のようにかけたしました。

28. どのさまは、おき上がろうともがきながら、大声でどなりちらしました。

「早く、あいつをつかまえる。つかまらないうら、弓でいころしてしまえ。」

29. 家来たちは、いっせいにおいかけました。けれども、白馬にはとてもおいつけません。家来たちは、弓を引きし

ほり、いっせいに矢をはなしました。矢は、うなりを立ててとびました。白馬のせには、つきつきに、矢がささりました。それでも、白馬は走りつづけました。

32. そのばんのことで。スーホがねようとしていたとき、ふいに、外の方で音がしました。

「だれだ。」

ときいてもへんじはなく、カタカタ、カタカタと、もの音がつづいています。ようすを見に出ていったおばあさんが、さけび声を上げました。

「白馬だよ。うちの白馬だよ。」

33. スーホははねおきて、かけていきました。

見ると、本当に、白馬はそこにいました。

けれど、その体には、矢が何本もつきささり、あせが、たきのようにながれおちています。白馬は、ひどいきずをうけながら、

走って、走って、走りつづけて、大すきなスーホのところへ帰ってきたのです。

34. スーホは、はを食いしげりながら、白馬にささっている矢をぬきました。きず口からは、血がふき出しました。

「白馬、ぼくの白馬、しなないておくれ。」

35. でも、白馬は、弱りはてていました。

いきは、だんだん細くなり、目の光もきえていきました。

36. そして、つぎの日、白馬は、しんでしまいました。

37. かなしさとくやしさと、スーホは、いくばくもねむれませんでした。

でも、やっとあるばん、とろとろとねむりこんだとき、スーホは、白馬のゆめを見ました。スーホがなでてやると、白馬は、体をすりよせました。そして、やさしくスーホに話しかけました。

「そんなにかなしまないてください。それより、わたしのほねやかわや、すじや毛をつかって、がっきを作ってください。そうすれば、わたしは、いつまでもあなたのそばにいられますから。」

38. スーホは、ゆめからさめると、すぐ、そのがっきを作りはじめました。

ゆめで、白馬が教えてくれたとおりに、ほねやかわや、すじや毛を、むちゅうで組み立てていきました。

39. がっきはできあがりました。これが馬頭琴です。

40. スーホは、どこへ行くときも、この馬頭琴をもっていきました。それをひくたびに、スーホは、白馬をころされたくやしさを、白馬にのって草原を駆け回った楽しさを思い出しました。そして、スーホは、自分のすぐわきに白馬がいるような気がしました。そんなとき、がっきの音は、ますますうつくしくひびき、聞く人の心をゆりうごかすのでした。

41. やがて、スーホの作り出した馬頭琴は、広いモンゴルの草原じゅうに広まりました。そして、ひっじかいたちは、夕方になると、よりあつまって、そのうつくしい音に耳をすまし、一日のつかれをわすれるのでした。